

## 格助詞を伴わない力の間接疑問文について

著者	高宮 幸乃
雑誌名	三重大学日本語学文学
巻	16
ページ	104-92
発行年	2005-06-26
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10076/6629">http://hdl.handle.net/10076/6629</a>

# 格助詞を伴わないカの間接疑問文について

高宮 幸乃

## 1. はじめに

日本語の間接疑問文には、用例(1)(2)のように、埋め込まれた疑問文（補充成分）に格助詞を伴うものと格助詞を伴わないものがある。

- (1) 私は、何人がパーティーに出席したのかを覚えていない。  
 (2) 私は、何人がパーティーに出席したのか覚えていない。

歴史的には、口語資料を中心に格助詞を伴わない間接疑問文が室町時代から見られ、一般的であったと考えられる<sup>(注1)</sup>。

- (3) 上に産んだか下に産んだか存ぜぬ。(エソボ・16④)  
 (4) お藤は聲あげなう痛や死ぬるはなう。助けてたべと泣叫ぶ文六鼻振に取り付き。これ母様いかやうの事か存ぜねども。詞にて御叱もあるべきに。あられなき打擲叔母様目でもまうたらば。何と言譯なされんと苦々しくいひければ。(堀川波鼓・p.51⑧)  
 (5) ○市村座助六狂言大当市村座春狂言大入にて市川八百蔵助六、岩井半四郎揚巻の役、別て大あたりのよし。吉原の妓揚巻、ある日棧敷をかり切、傘五百本進物にせしといふ説あり。実説か知らず。(半日閑話・巻十三・p.324③)  
 (6) 何様に叱られるか知れや仕ませんは。(春告鳥・p.599③)

本稿では、格助詞を伴わない間接疑問文について、現代と室町時代・江戸時代のもの进行比较対照し、日本語の間接疑問文の特徴を明らかにする。第2節では間接疑問文の種類、第3節では主節述語の種類、第4節では文型という観点から、それぞれ現代と室町時代・江戸時代の間接疑問文を取り上げ、検討し、第5節ではまとめと今後の課題を述べる。

## 2. 間接疑問文の種類

### 2.1 現代

現代語には、不定詞疑問、選択疑問、肯否疑問の三種類の間接疑問文があり、肯否疑問は「～カ」と「～カドウカ」という二つの形が見られる。

- (7) 私は、何人がパーティーに出席したか覚えていない。(不定詞疑問)  
 (8) 私は、田中がパーティーに出席したか欠席したか覚えていない。(選択疑問)  
 (9) 私は、田中がパーティーに出席したか覚えていない。(肯否疑問～カ)  
 (10) 私は、田中がパーティーに出席したかどうか覚えていない。(肯否疑問～カドウカ)

肯否疑問の「～カドウカ」という形は、管見の限り、江戸後期の江戸語資料『深川新話』(1779年)が初出である。他にも、江戸語資料には「～カドウダカ」という形も見られる。

- (11) 久しいのだから利かどふかしれねへす。(深川新話・p. 223 下⑥)  
 (12) 実はお前さんがお民さんに違ひなひかどうだかお聞申せと、若旦那に  
 一昨日私<sup>おと、わたし</sup>が被言<sup>いひかた</sup>付ました。(春告鳥・p. 553③)

一方、江戸後期の上方語資料では、「～カドウジャ」という形が見られることから、「カ+不定詞」の形には東西の対立があったと思われるが、これについては稿を改めて論じたいと思う。

- (13) …おまへ、おく気があるかどふじや知しらんが、おれハいるきじや。(漸本・落嘶千里叢・巻の五・p. 159)

したがって、ここでは(7)から(9)のような不定詞疑問、選択疑問、「～カ」という肯否疑問によって、それぞれ構成される間接疑問文を取り上げ検討する<sup>(注2)</sup>。

### 2.2 室町時代～江戸時代

室町時代から江戸時代のカの間接疑問文について、口語資料を中心に用例を調査し、次の<表1>に示した。

時代	室町								虎明狂言
	漢書抄	史記抄	湯山聯句	中華若木	蒙求抄	毛詩抄	天草平家	エソボ	
不定詞							2		
選択			1	2	2	2		1	7
肯否							4		15
時代	江戸前期			江戸後期				春告鳥	
	近松浄瑠璃	虎寛狂言	浮世風呂	梅児誉美	辰巳團	天草平家			
不定詞	3	12	8	8	9	17			
選択	6	9	2	1	2	2			
肯否	3	3	3	4	2	4	<表1>		

不定詞を用いない選択疑問とカ肯否疑問の間接疑問文は、室町時代の抄物を初出として、以降種々の文献に現れる<sup>(注3)</sup>。

(14)道ノニアルヲ岐ト云ソ カヨウカ、ヨハヌカ知レヌソ 字書ヲ引テミヌソ  
山ノ両岐ト云ノアイソ ニモ九モ多コトチャヤトニ 多コトカ知ヌソ (蒙  
求抄・一・40ウ⑬)

(15)上に産んだか下に産んだか存ぜぬ。(エソボ・p.16⑭)

(16)内に御ざ有かぞんぜぬが、うけ給れば、へち行をなさるゝとやらん申す  
ほどに、さだめて御内に御ざあらふかと存ずる。(虎明本狂言・上p.419⑰)

それに対し、不定詞疑問による間接疑問文は、室町時代から江戸時代前期にかけては天草版平家物語2例、近松浄瑠璃に3例見られるのみである。

(17)また法皇も押し籠められさせられてござれば、何とあらうか、知らねども、うかがうて見うと言うて、ひそかに奏聞せられたれば、法皇やがて院宣をくだされたを文覚はこれを首にかけて、また三日といふに伊豆の国へくだりつかれた。(天草平家・巻第二・146⑱)

(18)悪党が多う籠ってゐたれば、何たるものしわざか存ぜぬなどと種々様々のことを語られた。(天草平家・巻第二・294)

(19)いやその文は大事の文人には見せぬと取りつくを。はたと蹴倒し棕櫚箒押取って。さんざんに打伏するあれよ／＼といふ聲に。文六下女どもも駆付けて何事か存ぜねども。御堪忍と縫付き箒をたくれば。荷物につけし鼻搦引抜き。貌も頭も割れてのけとつゞけ打にぞ打ったりける。(堀川波鼓・p.51⑲)

江戸時代後期になると、不定詞疑問による間接疑問文は、一般的に見られるようになる。

(20)されば何と申事で御ざるか存ませぬ。(虎寛本狂言・中p.248⑳)

(21) どちらがおばさんかねからわからず。(浮世風呂・p.122②)

(22) 其子の咄しだっても、何だか知れもしねへ。(春色梅児誉美・p.50①)

### 3. 主節述語の種類

本節では、まず藤田 1983、1997 で考察された間接疑問文の主節述語(藤田 1983、1997 の従属句「～カ(ドウカ)」の述部)の特性や種類を紹介し、藤田氏の分類を基に間接疑問文の歴史的な様相を見ていく。

#### 3.1 現代—藤田 1983、1997 より—

藤田氏は、(23)に示すように、埋め込まれた疑問文が示す懸案に対して、述語が「答えられ解決されるかどうか」という観点から意味的な分類を行い(注4)、<未決>と<既決>というタイプを設定する。

(23) a 何が起こるかわからなかった。(藤田 1997 の(13)-a)

b 何が起こるかわかっていた。(藤田 1997 の(14)-a)

(23) a は、述部(本稿の主節述語)の懸案が<未決>であることを述べ、(23) b は、懸案が<既決>であることを述べている。<未決>と<既決>には、意味的な違いのほかに、「はたして」や「いったい」といった陳述副詞が共起するか否かという統語的な違いもある。

(24) a はたして何が起こるかわからなかった。(藤田 1997 の(13)-b)

b \*はたして何が起こるかわかっていた。(藤田 1997 の(14)-b)

藤田氏はこれら<未決><既決>タイプに加え、「懸案が「答えられ、解決される」という点でいえば、単に<未決>とも<既決>ともいえず、そうすべく<対処>しているというべき意味のタイプ」として<対処>タイプを設定する。統語的には、「はたして」や「いったい」などの陳述副詞と共起したり、命令形にすることができるという特徴を持つ。

(25) a どうしたらいいか考えた。(藤田 1997 の(15)-a)

b いったいどうしたらいいか考えた。(藤田 1997 の(15)-b)

(26) a 何があったのか明らかにした。(藤田 1997 の(16)-a)

b はたして何があったのか明らかにした。(藤田 1997 の(16)-b)

(27) どうしたらよいか考えろ。(藤田 1997 の(15)-c)

<未決><既決><対処>タイプには、(28)に示すような述語が現れる。この分類に依拠して、各タイプの述語が歴史的にどのように現れるかを次に見ていく。

- (28) a <未決>…覚えていない、知らない、わからない、疑問だ  
 b <既決>…覚えている、知っている、わかっている、明らかだ  
 c <対処>…考える、教える、調べる、探る、説明する

### 3. 2室町時代～江戸時代

次の<表2>は、室町時代から江戸時代にかけて現れる間接疑問文の述語について、疑問文の種類と述語のタイプ毎に整理したものである。

時代		室町						江戸前期
疑問文	述語	中華若木	蒙求抄	毛詩抄	天皇平家	エソボ	虎明狂言	近松
不定詞	未決				知ネドモ、存ゼヌ			存ゼネドモ2、知ラネドモ
	対処							
選択	未決		知レヌ、不知ヌ	知レヌテ候、知イデ		存ゼヌ	存ゼズ	切ッテハミズ、心定マラヌ、知ラヌ
	対処	精シク存知仕リタイ					ミテコヒ2、オシヤレ2、イヘ	聞キタイ、吐カセ、来イ置セウ
肯否	未決				存ゼヌ、ソノ他ニハ覚エヌ		知ラヌ、存ゼヌドモ、存ゼヌガ、	知ラヌ
	対処				タヅネウ		トフテコヒ8、オシヤレ2、トヘ、トハシラレヒ、キテコヒ、見ヨ	吟味セヨ、申セ
時代		江戸後期						
疑問文	述語	虎裏狂言	浮世風呂	春色梅見興美		春色辰巳園	番告鳥	
不定詞	未決	知ラヌ4、存ジマセヌ2、知レマセヌ、覚ヘマセヌ	シラネヘ、シラズ、シレヌ、存マセヌ、ワカラネヘ、ワカラズ、ワカラヌ、ワスレマシタヨ	知レモシネヘ、知ラネドモ、知ラナカタヨ、氣ガ付キヤアシマセン、ワカラネド、ワカリマセン、解セネヘ、ワスレシガド	知ラネドモ2、知レナイヨ2、ワカラヌ2、知レヤアシネヘ、ワカラネヘ、存ジマセヌガ	知ラネドモ4、知レヤ仕マセンハ2、知ラネヘガ、知レナイヨ、知ラナイガ、少シモワカリマセンネヘ、サツノワカラナヒコトデゴザイマスネヘ、ワカラネヘ、存ジマセンガ	聞タカ、オ聞カセナサキマシヨ	
	対処	問フテ来ヒ2、問フテ見サセラレイ、ミテ見ウ						
選択	未決	存セマセヌ2	ワカラネヘ、ワカリマセヌ	知レヤアシマセンハ	知ラナヘ	知ラネヘガ、知ルモノカ		
	対処	参テ見ウ						
肯否	未決		シランネヘ、シレネヘ、シラヌ	知ラネドモ、知ラネヘガ2、知レナイカラ	知ラネヘ2	知ラネドモ、知ラネド、知ラネヘガ		
	対処	問フテ被ドイ7、トフテ来イ2						

<表2> \*用例が2例以上の場合には、述語の後に用例数を示した。

これを見ると、<未決>と<対処>の述語が現れ、<既決>タイプは現れないことが分かる。室町時代と江戸時代における間接疑問文の主節述語に共通する特

徴は、一つには全体的に<未決>タイプが多いこと、二つには<未決>タイプと<対処>タイプが見られ、<既決>タイプが現れないこと、三つには<対処>タイプは願望のタイが付くか、命令形の形を取ることである。

(29)おこせうかおこすまひかいへ。(虎明本狂言・上 p. 287⑫)

(30)親孫右衛門は徒跣にて。どうぢや／＼忠三郎善か悪か聞きたい。(冥土の飛脚・p. 187⑬)

<対処>タイプの述語に注目すると、室町時代における選択疑問と肯否疑問の間接疑問文には<対処>タイプが見られるが、不定詞疑問の間接疑問文には<対処>タイプは見られない。選択疑問と肯否疑問の<対処>タイプについても表現に偏りがあり、室町時代から江戸時代の間接疑問文は現代ほどの表現のバリエーションは無かったといえる。

### 3. 3本節のまとめ

室町時代から現代までの間接疑問文の特徴について、<表3>から<表5>にまとめた。現代の間接疑問文では、三種類の疑問文にそれぞれ<未決><既決><対処>の述語がすべて現れる。それに対して、室町時代から江戸時代における間接疑問文は、疑問文の種類は現代と同様に三種見られるものの、主節述語のタイプは<未決><対処>のみが現れ、<既決>は見られない。<対処>の述語も、命令形などのモダリティー形式の形を取るものに偏り、現代ほどの表現のバリエーションは無かったといえる。

室町・江戸前期

	未決	対処	既決
不定詞	○	×	×
選択	○	○	×
肯否	○	○	×

<表3>

江戸後期

	未決	対処	既決
不定詞	○	○	×
選択	○	○	×
肯否	○	○	×

<表4>

現代

	未決	対処	既決
不定詞	○	○	○
選択	○	○	○
肯否	○	○	○

<表5>

## 4. 格助詞を伴わない間接疑問文の文型

### 4. 1 現代

現代の間接疑問文の文型には、次の三つがある。一つは、主語が疑問文の前に位置するSQV型(Sは主語、Qは疑問文、Vは述語動詞を表わす。以下、同様に示す。)、一つは疑問文が主語の前に位置するQSV型、一つは主語が現れないQV型である。各文型の特徴を次に述べる。

- (31) a 私は、何人がパーティーに出席したのか覚えていない。(SQV型)  
 b 何人がパーティーに出席したのか、私は覚えていない。(QSV型)  
 c 何人がパーティーに出席したのか覚えていない。(QV型)

#### 4. 1. 1SQV型

主語が疑問文の前に位置するSQV型の間接疑問文の場合、次に示すように、文としての独立性を高める要素であるダロウを疑問文に付加することはできないという特徴を持つ。

- (32) 私は、何人がパーティーに出席したのか覚えていない。  
 (33) \*私は、何人がパーティーに出席したのだろうか、覚えていない。

#### 4. 1. 2QSV型

疑問文が主語の前に位置するQSV型の間接疑問文は、用例(35)のような注釈的二文連置<sup>(注5)</sup>と語順が共通する。

- (34) 何人がパーティーに出席したのか、私は覚えていない。  
 (35) 何人がパーティーに出席したのか、幹事はみんなに声をかけていた。

また、文としての独立性を高める要素であるダロウを疑問文に付加することができる。この点でも注釈的二文連置と共通する。

- (36) 何人がパーティーに出席したのだろうか、私は覚えていない。  
 (37) 何人がパーティーに出席したのだろうか、幹事はみんなに声をかけていた。

すなわち、SQV型と異なり、QSV型の間接疑問文は疑問文が文としての独立性を保持する語順であり、その語順は疑問文が述語の補充成分として機能していない注釈的二文連置と共通するのである。ただし、注釈的二文連置の場合は疑問文が必ず主述の前に現れ、用例(38)のようなかき混ぜは不可能であり、疑問文が主節述語の補充成分にならない点で、QSV型の間接疑問文とは統語的性格を異にするといえよう。

- (38) \*幹事は、何人がパーティーに出席したのか、みんなに声をかけていた。

#### 4. 1. 3QV型

用例(39)のような主語が現れないQV型の間接疑問文は、(40)のようなSQV

型の間接疑問文における主語の省略とも、(41)のようなQ S V型の間接疑問文における主語の省略とも解釈できる構文である。

(39) 何人がパーティーに出席したのか覚えていない。

(40) (私は) 何人がパーティーに出席したのか覚えていない。

(41) 何人がパーティーに出席したのか (私は) 覚えていない。

また、ダロウの付加という観点からすると、Q S V型の間接疑問文と同様に、ダロウを付加することができるという特徴を持つ。

(42) 何人がパーティーに出席したのだろうか、覚えていない。

#### 4. 1. 4SQV型・QSV型・QV型の間接疑問文の位置付け

S Q V型・Q S V型・Q V型の間接疑問文について、文中の疑問文の独立性という観点から整理すると次のようになる。

Q S V型 > Q V型 > S Q V型

三つの文型の内、文中の疑問文の独立性が最も高いのは、Q S V型、次にQ V型、最も独立性が低いのはS Q V型ということになる。埋め込まれた疑問文の独立性が高ければ、注釈的三文連置に近づき、独立性が低ければ、述語の補充成分としてより完成し、名詞句的な性格に近づく。Q V型は、形の上ではS Q V型ともQ S V型とも解釈できる形式であり、かつ、ダロウを付加することもできるという特徴を持つ。したがって、文中の疑問文の独立性はS Q V型とQ S V型の中間に位置付けられる。

#### 4. 2 室町時代～江戸時代

##### 4. 2. 1 QV型

現代では、S Q V型・Q S V型・Q V型の三つの文型が間接疑問文に用いられるのに対し、室町時代や江戸時代の間接疑問文は、ほぼQ V型の形を取る<sup>(注6)</sup>。

(43) 爰ニ云タハ 周王ノ時トアルカ平王ノ時カ幽王ノ時カ知レヌテ候 (毛詩抄・三・22才①)

(44) 悪党が多う籠ってゐたれば、何たるもののしわざか存ぜぬなどと種々様々のことを語られた。(天草平家・巻第二・294頁)

(45) さたのかぎりな人じや、た〇ふだの人の仰らるゝは、いとまをこはずに

よそへうせた程に、せいばいをせうと云て、内にいるかいぬかみてこひ  
と仰付られたが、なんとしてよからふぞ (虎明本狂言・上 p. 319⑬)

#### 4. 2 <未決>タイプと<対処>タイプの主節述語

さて、先ほど、現代のQV型の間接疑問文について、ダロウが付加できるという特徴から、疑問文としての独立性を保持する構文として位置づけたが、それは室町時代と江戸時代の間接疑問文に現れる主節述語の意味的なタイプからも示すことができる。

先の<表3>から<表4>を参照いただくと分かるように、室町時代から江戸時代の間接疑問文では、主節述語には<未決>タイプの述語か、<対処>タイプが現れ、<既決>タイプは現れない。このような述語の意味的なタイプの特徴は、文中の疑問文の独立性と関わりがある。

藤田 1997 に指摘されているように、現代語では<未決>と<対処>の述語ではダロウを付加することができるのに対し、<既決>の述語ではダロウを付加することが出来ない。

- (46) いったいどうなるのだろうか、(私ニハ) わからない。(藤田 1997 の(23) - a)
- (47) はたして何が起こったのだろうか、一つ調べてくれ給え。(藤田 1997 の(24) - a)
- (48) \*どうすればいいのだろうかはつきりしていた。

<未決><対処>タイプは、埋め込まれた疑問文の独立性が高くても、後句の述語に結び付くことができるのに対し、<既決>タイプでは、疑問文が文としての独立性が高くなると後句の述語と結び付くことができないのである。これは、例えば、用例(48)「どうすればいいのだろうか」が表わす疑問文の意味、すなわち、当該の事態が発話者にとって不確定であることと、確定していることを表す「はつきりしていた」という語彙的な意味とが反対の内容を表わすことから、両者は結び付きにくかったのであろう。このような観点から、室町時代と江戸時代の間接疑問文には<既決>タイプの述語が現れないと特徴を改めて捉え直すようになる。<既決>タイプの述語が現れなかった室町時代と江戸時代における間接疑問文の文中の疑問文は、用例(48)の「どうすればいいのだろうか」に相当する独立性の高い成分として機能したのである。

#### 5. まとめと今後の課題

本稿で述べてきたことをまとめると、次の表ようになる。

## 現代

	未決	対処	既決
不定詞	○	○	○
選択	○	○	○
肯否	○	○	○
SQV型		○	
QSV型		○	
QV型		○	

&lt;表6&gt;

## 室町・江戸時代

	未決	対処	既決
不定詞	○	△	×
選択	○	○	×
肯否	○	○	×
SQV型		×	
QSV型		×	
QV型		○	

&lt;表7&gt;

現代の間接疑問文は、主節述語が<未決><対処><既決>タイプが現れるのに対し、室町時代と江戸時代では、<既決>タイプの主節述語が現れることがなかった。現代ではSQV型・QSV型、QV型という三つの文型が間接疑問文に用いられるが、室町時代と江戸時代では、ほぼQV型に構文が限られていた。QV型は主語が現れないことからSQV型ともQSV型とも解釈できる構文であるが、歴史的に現れる述語の意味的なタイプから観察すると、文中の疑問文は独立性が高い成分として機能していると考えられる。したがって、室町時代と江戸時代の間接疑問文は、現代のものに比べて、表現のバリエーションが少なく、注釈的二文連置に近い性質のQSV型ほどでないけれども、未だ文中の疑問文が文としての独立性を保持した構文として位置付けられるのである。

本稿では、格助詞を伴わない間接疑問文について現代と室町・江戸時代の比較対照を行い、以上のことが明らかになった。今後は、歴史的には現れにくかった<既決>タイプや今回取り扱わなかったカドウカによる間接疑問文の成立、さらには格助詞を伴う間接疑問文の歴史について考察を進めていきたいと考えている。

## [注]

注1 助詞を伴う間接疑問文は、管見の限りであるが、室町時代の抄物と抄物の流れを受け継ぐ江戸時代の随筆に数例見られるだけで、その他の文献には見られない。室町時代から江戸時代までは、格助詞を伴う間接疑問文は限られた文献に現れたものと考えられる。

- (1) 秦ノ趙高ト云モノガ、鹿ヲ指シテ馬ト為シテ<sup>1</sup>、我が云事ヲ本ニシテ、人ガキクカキカヌカヲ試タゾ。(湯山聯句抄・p. 367⑧)
- (2) 誰モ真ノ釣カ贖ノ釣カラバ見分ケマイゾ (中華若木詩抄・5③)
- (3) 其外法式にたがはざるか不法なるかを見わけ、矢のあたりはづれをたゞす役也。  
(一話一言・巻十一・p. 104①)
- (4) 後に牒状か返状かを書れよとて、窓より入るゝ事有り、此時始て知れり。(翁

草・卷之六十一・p. 410⑧)

- (5)始めて村家の燈光を認め、無運の藍葦間を直進せしに、竹藪となり、竹垣となり、暗中冥行、何れが道路か村里かを弁せず。(百花苑・在臆話記・第二集巻八・p. 272 下⑨)

明治時代になると、小説の会話文や心中文にも見え、一般的に用いられるようになったと考えられる。

- (6)「届くことは届くが、中るか中らぬかが疑問だ」と、岡田は答えた。(雁・p. 231⑩)

- (7)吾輩は先ず彼がどの位無学であるかを試してみようと思って左の問答を試みた。(吾輩は猫である・p. 25⑪)

注2 「カ+不定詞」の他に、「ヤ+不定詞」の形が江戸時代の随筆に頻繁に見られる。これについても併せて検討していきたいと考えている。

注3 間接疑問文以前は、次のような間接疑問文に似た表現が用いられたと考えられる。和文資料では、引用のト(モ)、注釈句による表現となる。

- (1)その故も、いかなりけむ事とも、思ひ分れ侍らず。(源氏物語・宿木・p. 91⑫)  
 (2)…折 $\swarrow$ につけて、(大君を)思ふ心の違へる嘆かしさを(大君に)かすむるも、(大君は)いかに思しけん、(著者は)知らずかし。(源氏物語・竹河・p. 284⑬)

訓点資料では、トイウコトヲという形を用いる表現となる。

- (3)二(は)〔者〕若(し)佛を標(せ)不して直に五の事を明か(さ)ば則(ち)此の經は為(し)是(れ)魔の説か、為(し)是(れ)佛の説か、為(し)内道の説か、為(し)外道の説かといふことを知(ら)不。(法華義疏長保点・序品初・p. 321⑭)

和漢混淆文ではト(モ)、トイウ名詞ヲ、注釈句を用いる表現となる。

- (4)母とち是をきくになしなくて、いかなるべしともおぼえず。(平家物語・上 p. 100⑮)  
 (5)日本秋津嶋は纒に六十六箇國、平家知行の國三十餘箇國、既に半國にこえたり。其外庄園田畠いくらといふ数を知らぬ。(平家物語・上 p. 94⑯)  
 (6)又宮の御在所は、いづくにかわたらせ給ふらむ、しりまいらせ候はず。(平家物語・上 p. 289⑰)

注4 「…従属句「～カ(ドウカ)」が、「答えられ、解決されるべき」懸案を提示するものであり、述部は、それが「答えられ、解決される」という点でどうなのかを述べる形で結びつくものだとすると、従属句の懸案が「答えられ解決されるかどうか」という観点で、相關する述部を意味的にタイプ分けすることができよう。」(藤田 1997:p. 3)

注5 野村 1995 の用語。「基本的に、自明的な実事性後句に対して、注釈的前句が付加されている。内容的には、前句による注釈的コメントによってのみ前後句が連結している

と言ってよい。自明的な後句は、その事の表現が実は情意の一つの現れであるが、事実を即自的に語っており、話者の判断性は前句に強くにじみでていると感じられるであろう。」(野村 1995:p.24)

注6 主語が示された構文は、調査の限りでは次の2例が見られた。

- (1) 汝は太郎くわじやが内にあるかいぬか見てこひ (虎明本狂言・上 p.319⑦)
- (2) 何とかいてあつたか初はわずれましたよ。(浮世風呂・p.295⑩)

#### [引用論文]

- 野村剛史 (1995) 「カによる係り結び試論」『国語国文』64-9, pp.1-27.  
 藤田保幸 (1983) 「従属句「～カ(ドウカ)」の述部に対する関係構成」『日本語学』2, pp.76-83.  
 藤田保幸 (1997) 「従属句「～カ(ドウカ)」再考」『滋賀大学教育学部紀要Ⅱ人文科学・社会科学』47, pp.1-10.

#### [使用テキスト]

- 池田廣司・北原保雄 (1972-1983) 『大蔵虎明本 狂言集の研究 本文篇 上・中・下』(表現社)  
 江口正弘 (1986) 『天草版平家物語 対照本文及び総索引 本文篇』(明治書院)  
 大塚光信 (1980) 『續抄物資料集成 漢書抄』(清文堂)  
 大塚光信・尾崎勇二郎・朝倉尚 (1995) 『中華若木詩抄 湯山聯句鈔』(岩波書店)  
 大塚光信・来田隆 (1999) 『エソポのハプラス』(清文堂)  
 岡見正雄・大塚光信 (1971) 『抄物資料集成 蒙求抄・毛詩抄』(清文堂)  
 笹野堅 (1943) 『大蔵虎寛本 能狂言 上・中・下』(岩波書店)  
 重友毅・守随憲治・大久保忠國『近松浄瑠璃集上・下』(岩波書店)  
 洒落本大成編集委員会代表 水野稔『洒落本大成 第八巻』(中央公論社)  
 高木市之助・小澤正夫・渥美かをる・金田一春彦 (1956) 『日本古典文学大系 平家物語 上・下』(岩波書店)  
 坪内逍遙 (1969) 『明治文学全集 坪内逍遙集』(筑摩書房)  
 中田祝夫 (1979) 『古点本の国語学的研究 訳文編』(勉誠社)  
 中野三敏・神保五彌・前田愛『日本古典文学全集 洒落本 滑稽本 人情本』(小学館)  
 中村通夫 (1957) 『日本古典文学大系 浮世風呂』(岩波書店)  
 中村幸彦 (1962) 『日本古典文学大系 春色梅兒譽美』(岩波書店)  
 日本随筆大成編輯部 (1975) 『日本随筆大成<第一期>8』(たんちょう社)  
 日本随筆大成編輯部 (1978) 『日本随筆大成<第三期>20』(たんちょう社)  
 日本随筆大成編輯部 (1978) 『日本随筆大成 別巻 一話一言 2』(たんちょう社)  
 武藤禎夫 (1979) 『断本大系 第十四巻』・『断本大系 第十六巻』(東京堂出版)  
 森鉄三・野間光辰・中村幸彦・朝倉治彦 (1980) 『随筆百花苑 第一巻』(中央公論社)  
 山岸徳平 (1958) 『日本古典文学大系 源氏物語』(岩波書店)

なお、新潮文庫の用例は、『新潮文庫 明治の文豪』CD-ROM版（新潮社）を使用した。

[ たかみや ゆきの 中部大学非常勤講師 ]